

住戸プランからみた可動収納の使われ方とあり方に関する研究

—脱 nLDK 化に向けて—

正会員 ○林一樹*
同 横山俊祐**
同 徳尾野徹***

可動収納 可動間仕切り 集合住宅
脱 nLDK 化 平面計画 中間領域

1. 研究の背景と目的

可動収納は居住者が日常生活の中で最も容易に空間を変化できる装置である。しかし、これを用いる事によって得られる住戸プランのバリエーションの中から、実際に1つの間取りを選択するのは住み手である。つまり居住者の住まいに対する意識や住まう力も求められ、住戸のプランニングもある程度は住み手に委ねられていると言える。反対に収納配置の自由度は設計次第であり、設計者は可動収納をオープン化できる単純な装置と捉えずに住戸計画すべきである。本研究では、可動収納をもつ集合住宅を対象に、変化する居住者の住要求にどのようにそれらが使われ、可動収納の性能とその住戸プランに必要な条件を把握することを目的とする。

2. 調査概要

本研究では、可動収納を用いてリビング(ダイニング)⇔個室のように典型的な分節方式を取り入れており、キャスターの有無など収納の仕様による移動の容易さの違いがみられるような事例、日之出北住宅1号館(大阪府大阪市)と茨木学園町団地の1・3号棟(大阪府茨木市)を対象に調査を行った。可動収納を有する世帯に可変性に対する意識・要求やそれらの利用実態と住まい方に関するアンケート・ヒアリング調査を行った。表1に各対象の概要を示す。

3. 可動収納の使われ方と住まい方

3-1. 使われ方

アンケートから収納を動かした世帯と動かしていない世帯は各々半数程度である。高齢者世帯では移動回数が少なく、女性のみ世帯でも同様である(図1)。逆にそれ以外の世帯では、半分以上は動かしてみようという意識が働いている。収納移動は力仕事なので、高齢者や女性の身体能力と収納の基本的性能(重量)を考慮しなければならない。

また動かしたことがないにも関わらず重たいという意見があがっている(図2)。実際動かすときは高齢者などでは移動できないほど重いということは考えにくいですが、家具=重たいというイメージが居住者についているのが分かる。また、動かした世帯は置く場所が限られているという意見が多い。居住者にとって可動収納は間仕切りとして役立たないと捉えられており(図3)、プラン別にみると部屋数が多くなるにつれ役立たないという意見が増えている。そのようなプランでは固定壁の多さや固

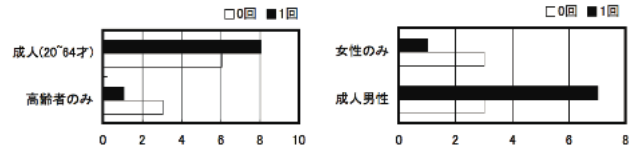


表1 調査対象の概要

	日之出北住宅					茨木学園町 2LDK	茨木学園町 3LDK	
	1DK	1LDK	2LDK	3DK (TYPE1)	3DK (TYPE2)			
平面図								
収納	■	■	■	■	■	■	■	
間仕切り	○	○	○	○	○	○	○	
室構成	DK, R1	R1, LD	R1, R2, K, LD	D, R1, L, R2	R1, DK, L, R2	R1, R2, LD	R1, R2, R3, LD	
収納	サイズ H×L×W	2610×1050×400 (780, 1000)	2610×940×995 (975, 1000)	2610×895×635 (1000)	2610×915×860 (1000)	2610×955×575 (1000)	2400×880×680 (1000)	2400×610×1275
	キャスター	無し	無し	無し	無し	無し	有り	有り
	可変領域	DK-R1	LD-R1	LD-R2	D, R2	R1	R1-R2	R1-R2
間仕切り	サイズ H (天井高)	—	—	1900 (2610)	1900 (2610)	1900 (2610)	2400 (2400)	—
	可変領域	—	—	LD-R2	D-L	DK-L	LD-R2	—

定収納の位置が原因と考えられる。

個室については全体的に開放的なつくりを望んでいると同時に、壁で仕切られた空間も必要との意見があがっている(図4)。これは、続き間を仕切る襖や収納での仕切りは柔軟な可変空間を生み出す上で有用であることを示している。

3-2. 住まい方

日之出 1DK では居住者はゆるやかで心地よい室同士の分節を望んでおり、可動収納は間仕切りとしての機能を果たしている。このプランの可動システムは各室の公私の境界を操作できる仕切りとしての役割をもっていると言える。1LDK の居住者は公室の拡張を希求しており、可動収納は間仕切りとして働いてはいるが、位置は変わっていない。要因は居室の出入り口によって収納の移動幅が限定されてしまっていると考えられる。日之出 2LDK の居住者は、居間にある収納が邪魔で移動しようとするが、天井の照明で移動できず、撤去するという結果に至っている。北側と中央の居室の間の固定壁が収納配置のバリエーションを限定してしまい、間仕切りとして機能していない。3DK (TYPE1) では間仕切りとしては機能しておらず、移動したのもダイニングの狭さ故の結果である。固定壁が多く、収納を間仕切りとして配置できるような位置は皆無といえる。3DK (TYPE2) では入居当初、ダイニングの拡張を望んでおり、入居期間の短さにも関わらず居間に続く室との間の可動間仕切りを全て取り外し、大きくカーペットを敷いてテーブルを室の間にまたいで配置していた。このプランでは北側の部屋は十分な室の広さは確保されているが、収納配置のバリエーションがこの室内でしかなく、廊下側の固定壁や固定収納の配置が他室への収納移動を妨げてしまっていることが問題である。

茨木 2LDK の居住者は子供の成長に合わせて個室の使い方や広さを収納で変化させている。可動間仕切りを取り外せば、居間の広さを調節でき、可動間仕切りが公私室間に設けられたことにより可動収納の可動域が広がり、どの部屋でも間仕切りとして役立つ可能性がある。

4. まとめ

可動収納が有効に利用されるためには、まず収納のサイズ・重量・可動性などの基本的性能を有し、その上で、住戸プランは図5のような条件に留意しながら、収納設置の場所が限定されないように計画しなければならない。特に固定壁や開口部によって配置のバリエーションが限定されるので注意が必要である。また照明・空調・コンセントなどの設備機器の場所にも気を付けなければならない。さらにリビングと個室の連続性・関係性は柔軟な家族関係を展開していく上で、最も慎重に計画すべきである。可動収納・可動間仕切りを公私室間に設けるなどの工夫が必要である。

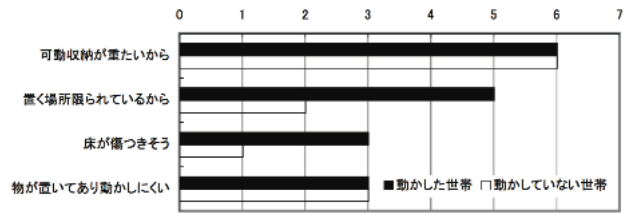


図2 動かした世帯とそうでない世帯の違い

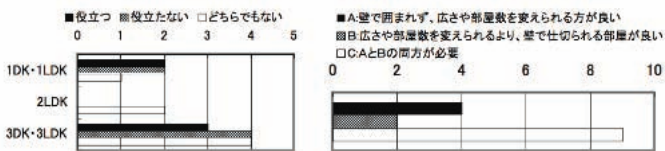


図3 間仕切りとしての収納

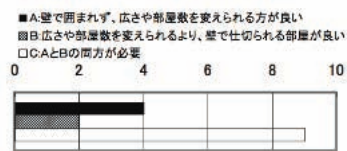


図4 個室の作り方

表2 各プランの住まい方と収納の置き方

日之出 1DK	日之出 1LDK
<p>2007.4~2007.6 2007.7~2010.10</p> <p>入居当初、息子に勧められ収納を部屋の隅に寄せたが、居心地が悪く元に戻す。今のやんわりと仕切られているような個室のつくりを好んでいる。入居時に家具を購入する必要がなかったため、収納としても役立つ。</p>	<p>2008.5~2009.10 2009.11~2010.10</p> <p>以前は北側の部屋で寝ていたが、一人なので、居間で寝るようになった。そのとき、布団を取りやすくするため、息子に収納を1つ居間側に向けてもらった。お客さんや息子が来たとき、もう少し居間が広い方が良い。</p>
<p>2008.5~2008.8 2008.9~2010.10</p> <p>備え付けの収納はかなりジャマだったので取っ払った。(移動はしなかったのですか)電気が天井にあるので移動は絶対無理だった。最初の配置は隣の部屋の壁に並べたいが欲しかった。収納ばかりいらぬです。</p>	<p>2008.5~2009.9 2009.10~2010.10</p> <p>寝る場所を移したので居間の建具は1つ取り外した。収納は必要ない。仕切ると場所もないし、奥行きが足りず、収納としても使いこなせない。模様替えの時も収納が邪魔になっている。</p>
<p>2010.10~</p> <p>ダイニングが狭いので居間の建具は全て取り外してしまった。部屋の広さを考えることは必要なことだと思います。空き部屋は子供が今2才で大きくなったら個室として使えんと思います。そのときに可動収納で部屋を作りたいと思います。</p>	<p>2006.10~2009.3 2009.4~2010.10</p> <p>収納は子供部屋を広く取るため、動かした。間仕切りは時間帯によって開閉している。</p>

間取りが不整形な配置	出入口が可動域を狭める	固定壁の量・位置
不整形な間取りの居室	設備(電気・コンセント etc)	公室と私室の中間領域
	<p>電気が邪魔で移動できない</p>	<p>可動間仕切り LD 固定壁 LD</p>

図5 可動収納が置けない(置ける)住戸プランの条件

*大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程
 **大阪市立大学大学院工学研究科 教授・工博
 ***大阪市立大学大学院工学研究科 講師・工博

*Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University.
 ** Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr.Eng.
 ***Lecturer, Graduate School of Engineering, Osaka City University, Lec.Eng.